



- ・本棚には
ヴァンパイア
- ・ウナギだけが…
- ・ネットの怪
- ・説明できないこと

本棚にはヴァンパイアがいっぱい

昨年はどういう訳か吸血鬼本の当たり年であった。御大種村季弘選による吸血鬼小説集『ドラキュラドラキュラ』が復刊されたと思いきや、国書刊行会より『幽霊綺譚 ドイツ・ロマン派幻想短篇集』が。この書は一八一六年夏、スイスはデイオダディ荘での伝説的な怪談義で読まれたことで名高い『ファンタスマゴリアーナ』の元ネタである『幽霊の書(全五巻)』から、『ファン…』所収品と代表作を集め初訳した傑作集である。

ナポレオン戦争後、ウィーン会議で中立となったスイスに、ヨーロッパ全土から富裕層が再び集まり始めた。バイロン卿もその一人。侍医、愛人、その義姉と後の夫がレマン湖畔に集った。記録的な冷夏に震える彼らは、赤々と燃える暖炉の前で詩を朗誦し、ドイツの幽霊譚(それが編訳された『ファン…』)を読み、怪談創作に興じて無聊を慰めた。驚くべきは、その時の侍医が後に「吸血鬼」を書くポリドリであり、愛人の義姉が『フランケンシュタイン』を十八歳で書き上げることになる

メアリー・シェリーだったことである。この話は長くなるのでこれ以上は触れないが、文学史上驚異の邂逅であり、後世の怪奇小説に決定的な影響を与えた。興味を持たれた向きは映画「メアリーの総て」を。

続いて光文社古典新訳文庫が吸血鬼文学の傑作を連続刊行。ゴッテイエ『死霊の恋/化身』、ブラム・ストーカー『ドラキュラ』、レ・フアニュー『カーミラ』。特に『ドラキュラ』は水声社の完訳詳注版を踏まえ、その後の研究成果も盛り込んだ訳注や解説が充実。これからドラキュラものを読んでみたい方には原典であり原点となる一冊。

そして間髪入れず出たのが『ドラキュラ・シンドローム 外国を恐怖する英国ヴィクトリア朝』。トランシルヴァニアからロンドンへ渡ってきたドラキュラは、人間の血を吸うことで自身の永遠の生を維持するとともに、被吸血者を「不死者」へ変え、人間を襲わせることで同類の増殖を目論む。が、哲学者・形而上学者にして優れた科学者ヴァン・ヘルシング教授らの反撃に遭

い、ロンドンを追われ生地の居城に戻るも、彼らの追撃によって消滅させられる。一見単純な筋書きに「十九世紀末のイギリスの集合的意識と無意識」が見え隠れする。なぜドラキュラは東欧の最奥からロンドンへ侵略/侵入してくるのか? また、ロンドンでの拠点選別に法則は? ヴァン・ヘルシングがオランダ人なのはなぜ? 物語に医師が二人も必要? 戦いでたった一人命を落とすのがアメリカ人なのは意味がある? もちろん『ドラキュラ』だけを読んでも答えは見つからない。同時に代に関する様々な学問分野のテクストを相互連関することで見えてくる、快刀乱麻を断つがとき一書。

最後に今年五月に出た新刊『シャドウプレイ』を。若き日のブラム・ストーカーは、人気俳優ヘンリー・アーヴィングに劇場の支配人として仕えながら、創作ノートをつけ始める。小説が形作られるにつれ、想像の産物が影絵芝居(シャドウプレイ)のように現実に影を落とし始める。ジョンサン・ハーカーが劇場で働いていたり、ミナが亡霊として出たり。そしてついにはあの伯爵が…。虚実緋い交ぜの『ドラキュラ』誕生譚。

こうして本棚にはドラキュラ本が増殖していく。

怖いのは

生きている人間

幼い頃にテレビで「耳なし芳一」を見てから、ホラーや幽霊を苦手としている。耳をむしり取られるなんて残酷な! 幽霊って怖いと純粹な気持ちを引きずり、大人になってから「雨月物語」を習っても同じ気持ちであった。

今回紹介する『ロンドン幽霊譚傑作集』を手に取ったのは、帯にある「探偵たちと切り裂きジャックの世紀」の文句に、そういえばポアロにも降霊会から事件が始まる事があつたな、ロンドンと日本は幽霊に対する描写も違うのだろうかという好奇心からだ。

ロンドンにまつわる幽霊の話が十三編収録されている。公園で霊に遭遇したところから始まる「ザント夫人と幽霊」や過去の殺人が暴かれる「降霊の部屋にて」などサスペンシブも満載で、日本の幽霊のように呪い殺すというよりも、生きている人間の罪を暴いて去っていく話が多く、霊に対する恐怖の誇張というより、生きていく人の方が恐ろしいと霊に肩入れしてしまうところも多い。

最終話「令嬢キティー」は特に異色。主人公と元氣いっぱい少女幽霊キティーの会話はコントか? と思

うほどのテンポで進み、明るく読了した。幽霊という題材の割に陰から陽まで実にバラエティーに富んだ一冊である。

アメリカ版「百物語」を

堪能あれ

表紙のかわいさに目が留まりつい手にとってしまった『いろいろな幽霊』。幽霊にまつわる百のショート・ショートを集めた短編集だ。幽霊側の視点のものもあれば、幽霊に関わった人間側の視点のものもあり、全ての物語が二ページで完結する。たった二ページという短い中に作者のアイデアがこれでもかと盛りこまれていて、全ての物語が決してありきたりな結末にはたどり着かない。例えば、既

あきれることなく読み進められるのは、登場人物たちの姿や周りの情景など、細部にこだわった筆致があるからこそだろう。

じっくり読むもよし、ちよつと気分を変えたいときにぱつと開いたページから読むもよし、さらに巻末には目次ではとらえきれない索引も掲載されているので、そこから気分に合わせて読む物語を選ぶこともできる。いたるところに著者の遊び心が感じられて、読む前から読み終わった後までずっとわくわくさせられる一冊となっている。

解説の勝山海百合氏によれば、本書の原題「Ghost Variations」はドイツの作曲家ロベルト・シューマンが晩年に作曲したピアノ独奏曲「主題と変奏」から着想を得ていることは想像に難くないとのこと。この「主題と変奏」は「Geistervariationen（幽霊変奏曲）」とも呼ばれている。幽霊ひとつで百ものバリエーションを作り上げた著者の想像力と語り口に感服しながら、ひとつひとつの物語を楽しみたい。



事件の謎は

ウナギだけが知っている

棚に並べた後、なぜか何度も目が合ってしまう本というのがある。

『ウナギの罫』は、ウナギの尻尾のイラストと、帯にある「スウェーデンのディスクン・カー」の惹句がどうにも気になり、ある時思わず手にとった。すると裏面の帯には「戦後の横溝正史を思い出した」とあるではないか。中学校時代に杉本一文表紙の黒い文庫本をせっせと収集していた私は、かくして、あまり馴染みのない六十年代スウェーデンミステリを体験してみることにした。

とある満月の夜、田舎町の湖に仕掛けられたウナギの罫の箱の中で、強欲な大地主が頭を殴られて死んでいるのが見つかった。死体の首には太いウナギが巻き付いている。箱は外から施錠され、南京錠の鍵は地主のポケットに入っていた。水中に沈められた罫の箱は水が抜かれ、死体の衣服は乾いていた。閉鎖的な土地、交錯する人間関係、有り余る動機など、確かに金田一的な要素が濃厚。次第に謎が深まり、ゆっくりにじっくり時間をかけて犯人を特定していくこのかんじも横溝作品に似ていて、なんだか懐かしくて楽しかった。この不可解な密室トリックに挑むのは、派手なストライプのスーツ

に、サンゴが渦巻くようなネクタイを身にまとった丸い小男、ドウレル警部。不可解な動きを見せる嘘にまみれた容疑者たちに、執拗にアリバイ捜査を行うが、常に紳士的でどこ

となく品がある。奇想天外なトリックと意外な犯人、衝撃の結末に、後半は一気読みした。

スウェーデンの古典名作が五十七年の時を経て、翻訳、出版され、こうして手に取ることができるようには有難い。この何とも言えず滋味深い怪奇ミステリを是非体感していただきたい。



事件簿というよりは

不可思議な話

一九〇〇年代初頭、スキタイパノニアという架空の都市が舞台。重帝国という架空の都市が舞台。『エステルハージ博士の事件簿』というタイトルからは読み取れない不可思議で難解な話だった。法学博士、医学博士、文学博士、哲学博士、理学博士、その他もろもろ幅広い領域に精通したエステルハージ博士が不可思議な事件に出くわす八つの短編集である。

最初は宝冠の盗人を見つけ出すという事件簿らしい出だし。短編を読み進めていくと、熊と暮らす老女の話、「神聖伏魔殿」という宗教団体を調べる話、オッド装置という謎の仕掛けで奇術を起こす魔術師スミス卿に出会った話と何のジャンルを読んでいるのか分からなくなつた。それでも次は何が起ころのかと読み進めてしまつたのは作者の術中にはまつたのだろう。

難解ではあるが素直に読んでもらいたいたいという、殊能将之さんによる解説のページがありがたかつた。舞台は東欧の架空の国で、背景も状況もすぐに把握はできず、風変わりな登場人物ばかりで、真偽不明な結末も多かった。なじみのない舞台設定やちりばめられた外国語などによる不親切さから来る一味違った読後感は、素直に楽しめたと云える。短編であるが、順番に読んでいくとこの架空の国の結末が想像でき、分からなかつた部分を読み返したくなる中毒性を感じる物語だった。

「これは

ホラーストーリーです。」

現在二十二歳の青年ジェイミーが、少年時代を回想しながらストーリーが進む。文芸エージェン

を生業とする母と二人暮らしの少年ジェイミーは父親を知りません。四歳のころ、交通事故現場で初めて幽霊らしきものを見ますが、何度か遭遇するうちにいくつかの法則に気づきます。幽霊といっても死にたてで、そのままの姿で死んだ現場に現れ、会話もできない。「死者は嘘をつくことができない。」そして数日間徐々に薄れて消えていく。成仏した？

序盤では見える力があることによつて心温まるエピソードが展開されますが、ストーリーは一転。彼の力を知った大人によつて凶悪な事件に巻き込まれていきます。法則から外れた悪霊との闘いや、信頼している人に裏切られる少年の心情を思うと、恐れや葛藤、絶望感で胸が締め付けられる思いです。ラストの二章で伏線が回収されるもやややっていた謎が解き明かされるのですが、最後の一行。最初からまた読み返す自分がいました。



Stephen King

ネットの怪

テレビドラマ『不適切にもほどがある!』は昭和に生きる主人公が、突然令和にタイムスリップするところから始まる。主人公が驚くことの一つはスマホだ。初めてスマホをみた主人公は狐につままれたような顔をする。一九八〇年代の昭和からやってきたものにしてみれば、四〇年後の技術は怪奇現象のようなものだろう。

ユリウス・カエサル時代からアメリカ建国の頃まで変化のなかったものがある。メッセージを送る速度だ。人や馬が運ぶ以外のすべはなかった。遠国での戦争の結果を知るには何カ月も待たねばならなかったし、ロマンを求めて航海に出たものからの知らせは数年もかかった。何千年もそのスピードは変わらなかった。大きな変化は一九世紀ヴィクトリア朝まで待たねばならない。

『ヴィクトリア朝時代のインターネット』は電信(テレグラフ)技術の発展を描く。初期の電信と現在のインターネットの仕組みがとて似ていることへ驚きを隠せない。電信は人が入力することで電氣信号に変換していたが、インターネットは人の部分がコンピューターに変わっただけでも言えるのだ。社会現象も似ている。グローバル網・電信のオペレーターと電信

相手の恋、電信の中身を盗み見られないように暗号の開発、それを破ろうとする現在のハッカーのような人たちの存在……。現代と見聞違うばかり。電話が発明されると、電信はあつという間に衰退していくのだが、電信の発明なしに現在のインターネットは存在することはなかったことがうかがえる。

ヴィクトリア朝時代に現れた電信技術を魔術のように感じる人々もいた。テレグラフを魔法と思う人たちがスマホをみたらどうなるだろう。ヴィクトリア朝から令和へのタイムスリップはお断りせねばならない。



煮ても焼いても美味しい

デビルフィッシュの話

未知のモンスターというものは、いつの時代も人を惹きつけてやまない。特に生物学をかじった人間からすると、その生物がどのような生態を持っているかを考え

ると知的好奇心が踊る。しかしながら、幽霊の正体が枯れ尾花であるように、モンスターの正体もがっかりする内容であることも多い。例えば、南米のUMA「チュパブラ」は皮膚病を患ったコヨーテであったことが判明したとか。ところが、正体が判明してもなお奇怪さを失わない生物もいる。かつて海洋モンスターのモチーフになり、一部の国では未だに悪魔の魚と恐れられる生物、すなわちタコである。

タコは、よくよく考えてみれば、奇怪な生物だ。足が八本あり、九つの脳と三つの心臓を持ち、血が青く、体の色や形質を変化させ、墨を吐く。頭と足の位置があべこべな人間とは、さぞ理解し合えない存在であろうと思われが、『神秘的なるオクトパスの世界』の著者、サイ・モンゴメリー氏と、彼女が出会ったタコ達は異を唱える。作中で語られる彼女らの触れ合いは、およそ人とタコのそれとは思えないほど親密で感動的だ。

本書で描かれるタコの脅威の生態は、既存の常識を超えてくる。まさに、「枠にとらわれずに考える必要がある」のだ。特に知能の高さは目を見張るものがあり、子供用玩具で遊び、盾を用いて防御し、人間の顔を記憶できるといふ。彼らの高度な擬態能力も、「高度な認知によって駆動、あるいは支配さ

れて」おり、「神経系によって制御される」といふ。個人的に好きなエピソードは、オーストラリア東岸沖に形成されたオクトポリス、すなわち「タコの王国」だ。単独行動を好むとされたタコ達の愉快で奇妙な集団生活、タコドラマは、もはや実在するおとぎ話である。

現在、欧米諸国ではイルカやクジラを食べるのは「法度だ」といふ。理由の一つは「賢い生物を殺して食べるのはかわいそう」であるからだとか。本書を読んでいると、同様の理由でタコの禁漁が叫ばれる日も近そうである。……とところで、最近「タコのガルシア風」という料理を覚えてまして。これが簡単な上にお酒にも合って最高なのです。「タコのルチアーノ風」も簡単な上、パスタと和えると美味しい。もし機会があればぜひ作ってみて欲しい一品なのです。



小泉八雲没後 百二十年記念

今年是小泉八雲が亡くなってから百二十年で様々な関連行事も予定されています。

記念年に合わせて、八雲逝去の年(一九〇四年)に刊行された最も有名な著書である『怪談』が手軽に読めるよう再編集、文庫化されました。訳者はダンテの『神曲』の翻訳などで有名な比較文学者平川祐弘です。

幼いころ「雪女」や「耳なし芳一」「むじな」などを人形劇やアニメで初めて知り、日本の怖い話として好きではありましたが、著者の小泉八雲がラフカディオ・ハーンというイギリス人であり、英語で最初に書かれたものを日本語に翻訳し直されていた物語だったと知った時は衝撃でした。(妻の節子が語る怪談を巧みに物語にしたものです。)

『怪談・骨董』は怪談奇談中心であるのに対して、『心』は明治日本を冷静に見つめた稀代の日本解枳者としてのハーンの珠玉のエッセイ、評論集です。

巻末のハーン自身の註、訳者平川の註、訳者平川の解説も読みごたえがあります。

説明できないうい

私の母方の祖母は亡くなる時、意識朦朧と昏睡状態を繰り返して、何度も三途の川から引き返してきた。ある日の午後、心残りが解消されるとようやく未明に逝くことができた。

最初の結婚で配偶者と死別し娘を婚家に残して再婚した祖母の元へ、五十年以上顔を見ることさえなかったその人は駆けつけてきた。祖母の手を握り、声をかけた。未練や心残りを溶かす時間、祖母の顔つきはみるみる変わった。不安定な意識のまままで（ひと目会えた）のはどういう知覚のからくりなのかと、不思議に思っていた。

このテの死に際の不可思議な話は世界中にある。それらの現象を認知科学者が研究して著した

『死の前、「意識がはっきりする時間」の謎にせまる』では、「年齢、性別、病名、予想外の事象」の四つのデータで報告書を作成することから始め、途中、当事者が何を見たか聞いたか感じたかを調査項目に追加している。

素人の自分には科学的な調査なのか判断できない。脳科学や生理学からの説明もなく、メカニズムはよくわからなかった。怪しい話ではある。ただ、たかさんの当事者の経験談があげられていて圧巻ではある。死の直前に、認知症患者の意識が元に戻り以前のように対話した話、家族の写真を見ながら語り合った思い出など、誰かが体験した暖かい時間が述べられていく。科学的な説明ができなくても、ひとつひとつのその時間は確かに存在して家族はそれを忘れない。

カメラ好きに薦めたい物語

パラパラとページをめくった際、各章に付けられたタイトルが気になった。ニコン D60、コダックインスタマチックX265、コダック等すべてカメラにまつわるワードがつけられており、カメラ好きがこの本を手にとったら、私と同じくまずは読んでみるというところが自動的に行われるはずだ。

主人公リタは警察鑑識課の写真係。生まれながらに幽霊が見え、事件事故で亡くなった被害者たちがリタに話しかけてくる。幽霊と力を合わせて事件解決に挑むユーモアあふれるミステリーかと読み進めたがそうではない。この小説は、二つの物語が交互に構成されており、ひとつはリタ自

身の霊能力と故郷のナホバでの生い立ちについて。もうひとつは、高速道路で死亡したクセの強いアーマーという女性の幽霊とリタの犯人への復讐劇。

全く別の物語が同時に始まるわけだが、〈家族〉〈ナホバ〉〈カメラ〉を介して二つの話がすこしずつ絡み合っていくのがとても興味深い。特にナホバは、アメリカ南西部インディアン部族が住む地方で、彼らの独特な文化や思想がリタの生き方に与えることは、日本人とは違った感覚があり海外小説ならではの面白さだと感じるはずだ。



「瞳を」として
31年ぶりの長編新作
「ミッパチのメキヤキ」
公開を記念して旧作
「ミッパチのメキヤキ」
スールが特別上映された
「ここには前者について
語ってみたい。」

冒頭「フラケンミタイン」
の上映を見た幼少リ
タは、なぜ怪物はやさしく
してくれたのか？ 自身も
なせ殺されてしまったのか？
と、真実に向う。
姉のイザベルは、
知ったかぶりな本音は誰も
死んでない。怪物は精霊で
目を閉じて私を助けて
目の前に現れると答える。

映画「フラケンミタイン」
では怪物の脳に殺人者
のものが使われる。
原作にはない設定で、知性
と容貌のギャップやアイ
ディティティなどの問題を
うまく回避し、ホラー映画
として大ヒット。しかし、ア
ナの疑問は残る。

「瞳を」として「終盤ア
ナ（ミッパチ）と同じ役者が
演じている」が記憶をなく
した父に「私はアナ」と呼
びかける（震えがきこえた）
ここからラストの上映会
までは一気呵成だ。
今年のベスト映画はこれ
決まり、とわざわざ誇りに
なカケオくんであった。ふ



読んでいたい本

『百年の孤独』を読んでいると、子どもの頃に描いた花の絵を思い出します。めしべから花びらの輪

郭を一枚ずつ正確に写しているはずなのに、一周に収まらなくなっていました。

ガルシア・マルケスの文は、出来事の詳細を記録すると、文字数と一緒にその部分の時間も膨らんでいくように感じます。登場人物の寿命も当てにならないので、夢中になると物語の時間がどのくらい経ったのか分からなくなります。

半分を過ぎて、読者と最も身近な存在のウルスラに、「近ごろの一年一年は、昔とまるで違うね」と言われると、変な気分になりました。

また、比喩表現だと思っていたら、日本とは違った感覚があり海外小説ならではの面白さだと感じるはずだ。

